第７回　総合計画審議会　会議録		
召 集 年 月 日	平成 28 年 2 月 18 日（木）	
召 集 の 場 所	白馬村保健福祉ふれあいセンター2 階　学習室	
開閉会の日時	開会	午後 2 時 00 分
	閉会	午後 4 時 00 分
出　席　者　数	２２名出席	

	区分	役職名	氏　名	出席
出席者	教育委員会委員	白馬村教育委員会委員（会長）	伊藤　公一	○
	公共的団体の役職員	白馬村体育協会会長（副会長）	山岸　忠	
	教育委員会委員	白馬村教育委員会委員	塩島　弘之	○
	農業委員会委員	白馬村農業委員会会長	松沢　正猛	○
	公共的団体の役職員	白馬村民生児童委員	矢口　緑	○
	公共的団体の役職員	白馬商工会長	杉山　茂実	○
	公共的団体の役職員	区長会会長	山岸　弘明	
	公共的団体の役職員	白馬村消防団団長	横山　義彦	
	学識経験者	まちづくり白馬友の会会長	松澤　悳也	○
	学識経験者	神城婦人会会長	田中　みつる	○
	学識経験者	北城婦人会会長	眞島　宣子	○
	学識経験者	白馬村スキークラブ会長	太谷　陽一	
	学識経験者	白馬村シニアクラブ会長	吉澤　豪俊	○
	学識経験者	大北農協白馬支所長	内川　武文	○
	学識経験者	白馬村索道事業者協議会会長	駒谷　嘉宏	
	学識経験者	白馬村観光局長	北村　興二	○
	学識経験者	白馬村ボランティア連絡協議会会長	太田　洋子	○
	学識経験者	特別養護老人ホーム白嶺所長	南沢　裕子	○
	学識経験者	白馬村金融団幹事長野銀行白馬支店長	宮島　賢次	○
	学識経験者	白馬村建設業組合長	塩島　正	
	学識経験者	観光地経営計画委員	ケビン　モラード	
	一般公募	公募委員	宮脇　哲也	○

	一般公募	公募委員	藤田　直子	○
	一般公募	公募委員	冨山　正明	○
	一般公募	公募委員	髙田　愛史	
		株式会社　studio-L	醍醐　孝典	○
		株式会社　studio-L	小山　弘二	○
	事務局	白馬村役場総務課　課長補佐	松澤　孝行	○
	事務局	白馬村役場総務課　企画係長	太田　俊祉	○

1. 開　会

【事務局　企画係長　太田】

開会を宣言した。

2. あいさつ

【伊藤会長】

この１週間、暑くなったり寒くなったり、激しい温度変化であったが、体調はいかがだったでしょうか。このような天候の変化を繰り返しながら、だんだん春に向かっていくのかなと感じている。現在、ご審議いただいている総合計画については、３月の答申に向けて今週、来週と急ピッチで作業を進めていきたいと考えているのでよろしくお願いしたい。先週は「白馬アイデアキャンプ」を、村民の皆さんからご意見をいただくということで開催したが、多くの方からコメントやご意見をいただいたようであるので、それをふまえて議論を進めていきたい。前回の役場各課から出された施策や委員各位から出された意見、村民から出された意見を色々と加味して基本構想の原案をまとめた。これをたたき台として審議を進めていただきたいので、よろしくお願いする。

3. 協議事項　（伊藤会長が進行を務める）

(1) 白馬村第５次総合計画基本構想の素案について

【伊藤会長】

事務局に説明を求めた。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

前回の審議会で、庁内から出された施策大綱について委員各位から意見をいただきたいとお願いし、事務局にいただいているところであるが、追加で出た意見があり、それを含めてまとめた上で、資料として後日委員各位に送付したいと考えている。

また、前回の審議会で７つの施策大綱をお示ししたところであるが、内部で検討した結果、このままの形で基本構想に載せていくと、住民が見た場合に分かりにくいという意見があり、この７つの施策大

綱については、基本計画の体系に活かしていきたいと考えている。そのため、委員からいただいた意見や庁内で出された現状と課題を総合して、資料にも記載されているが、４つの基本目標にまとめさせていただいた。また、先週行われた「白馬アイディアキャンプ」や、４０人以上に行った個別インタビューでいただいた意見の中から見えてきた白馬村の課題といったものを、基本理念や基本目標に込めさせていただいた。

以降、事務局から資料１により、基本構想の原案について説明があった。

事務局より、（株）studio-L に捕捉説明を求めた。

【（株）studio-L　小山】

当方から、基本構想の言葉やキャッチフレーズなどが、どのように導かれたのか説明をしたい。

大きく２つに分けて「個別インタビュー」と「住民キャンプ」によって住民の皆さんから意見をいただいているので、それぞれについて説明したい。

まず「個別インタビュー」についてだが、昨年１２月から今年２月まで実施し、延４５名の方にご協力をいただいた。

様々な属性の方（村長・経営者・福祉施設や障害者施設スタッフ・医師・中学生や高校生・学校の先生・スポーツ選手・若い世代のご夫婦・サラリーマン・外国人移住者 等）にお願いし、ご意見をいただいた。

どういった意見が出たのか原案と重複するが抜粋する。

・村内の雇用確保、グリーンシーズンの強化
・村外への移動時間がかかる
・２，３歳くらいの子どもが遊べる公園が欲しい
・良い自然環境、地域シーン、文化があるのに子どもたちにあまり継承できていない
・ホテル、民宿に後継者が少ない
・イベントが充分供されていない
・子育てと仕事を両立させたい
・美しい風景を残したい

別途報告書内で４５名分のインタビューをまとめてご報告をする。

続いて「アイディアキャンプ」についてだが、総合計画づくりということで２月９日から１１日まで３日間通して行った。

ウィンターシーズンに行うということで一概に指定日にお越しいただくのが困難だったため、昼間（１３時くらいから）は「カフェタイム」と称して意見を出していただく場を作り、夜は２０～３０名弱の集まっていただいた村民の方々同士で意見交換をする「キャンプ」を行った。

内容について写真資料を用いながら説明する。

「カフェタイム」では、ふれあいセンター１階・社会福祉協議会のロビーにてお茶やお菓子を用意して意見交換・話し合いをするスペースを設けた。

壁には、来ていただいた方へ見ていただけるように個別インタビューの内容をテーマ毎に掲示し、それを見ていただきながら・飲食していただきながらインタビューをしていった。

将来像・こうなったらいいなといった希望と、気になっていることを色分けして掲示している。

カフェで集めたインタビューは同様に掲示し、「キャンプ」の意見交換時の参考にしていただいた。「キャンプ」は、目的が総合計画なので、白馬村の１０年後がどんな風になっていたら嬉しいかを話し合う場として設定した。

村民はもとより行政関係者も一緒になった話し合いの場をつくり、且つそれを計画づくりに活かしていこうというもの。これは先の説明にもあった将来像の部分と課題の部分が絡んでいくこととなる。

夜の部（キャンプ）については具体的なテーマを設定し、話し合ってもらった。

福祉・医療や観光・教育、コミュニティ・防災、農業と、インタビューの中で関心がある・課題認識を持っているテーマを集約し話し合ってもらった。

１日目は３０名前後の方に集まってもらい、意見交換をした。

弊社（(株）studio-L）醍醐より冒頭に、意見交換の場で何も無く話し合うのも難しいだろうということで（島根県）海士町の事例を紹介し、審議委員にも参加いただき意見交換をした。

最終的に、イラストを入れた模造紙に色分けした意見カードを貼り付け・整理して終了した。

２日目は（１日目が少し堅かったので）趣向を変えて、肩たたきや床に座りリラックスした状態でカフェや１日目に作成した意見カードを見ながら更に意見を出し合って纏めていった。

３日目も、前日までの意見カードを紹介しながら意見交換をした。年配の方にも来ていただき、床や椅子に座って楽しみながら意見交換をしていただけたように思う。

キャンプで出された意見を抜粋で紹介する。

『観光』

・自然環境が素晴らしいので、なんとか活かせたら

・夏になると仕事が無い

『コミュニティ・防災』

・空き家を、活用したい若い人や外国人に提供出来ないか

・コミュニティが活かされ、村全体に繋げられたら良いのでは

『福祉・医療』

・住民と専門職や行政が話せる場があれば

・村内に耳鼻科と眼科が無く大町市に集中するので、村内にもあれば良いのに

・定住する外国人向けの医療および福祉の専門家が必要となるのではないか

『子育て・教育』

・大人から子どもたちへ、白馬村の魅力を伝える場があると良い

・公園があったら良い

・図書館の蔵書がもっと増えると良い

『農業』

・(物価が高いせいもあるのか）地場産野菜を安く買えるところがあれば

・蕎麦や米はあるが、ブルーベリー以外の果樹栽培の促進をしていくと良いのでは

最終的なまとめは後にしていくが、カフェ・キャンプ併せて８０名程の方に参加いただき、重複はあるが述べ４００程の意見が集まった。

２月１０日に村長にもインタビューをしており、その内容をふまえて出したキャッチフレーズが“豊かな暮らしと観光を育む、村ごと自然公園・白馬”である。

この思いとして書かせていただいたのが、先程読み上げた１４ページ下部分「このように住民が一緒になって～」の部分、メインタイトルとサブタイトルの部分である。

それ以外で補足すると、“豊かな”とはありふれた言葉ではあるが、白馬村の資源であったり、今回寄せられた意見等からすると適当ではないかということと、暮らしと観光に掛けているのだが、特に観光に関して「いかに活用していくか・いかに魅力的な物を発信していくか」というところで、豊かさをもっとアピールしていくと良いのではないかということと、暮らしの部分で言うと、震災があったところというわけではないが、コミュニティがあることによって豊かな暮らしや連携・共助が形成されているので、今後１０年間も維持・発展していけていると良いのではないかという思いにより選んだ。

別の視点で言うと、外国人の方もこういった山岳の景観といったところで来られているというのもあるのだろうが、定住されている外国人の方からはそれだけではなく、「白馬の人・暮らしも魅力的で、ずっと住んでいきたい」といった話も聞いたので、日本人だけではなく外国人の方に向けても強く取り組んでいけたら良いのではないかということで（“豊かな”という言葉を）選んだ。

そのあとに続く“村ごと自然公園”だが、前回の総合計画の言葉を踏襲して進めていきたいとの村長の意向もあり、入れた言葉である。

その下に書いてある“多様性から学びあう、日本社会のトップランナーを目指して”という部分で、キャンプでも参加者へ話したことだが、インタビューやキャンプを通して見えてきた課題が大きく２つある。

１つは、日本の課題・特徴でもある『少子高齢化』や『子育て環境』の問題。もう１つは白馬村の特徴・独特な課題である『インバウンドに伴う外国人の投資・定住に関する地元住民とのルールづくり』の問題。この二方向から白馬村の課題が進んでいるところがある。

このように多様な課題が同時に進んでいる環境の中にあるので、定住者・移住者なども含めた多様な人達と学びあいながら取り組んでいかないと解決するのは難しいのではないかと考えたので、“多様性”・“学びあう”という言葉を入れた。

そのあとに続く“日本社会のトップランナー”だが、経営者の方が多いということもあり、全国の他市町村と比べる必要はないのかもしれないが「何を目指すのか？」といったところで、白馬独特なもの・トップを取れるようなものを目指していったら、誇れる唯一のものを目指すと良いのではないかと思い、入れさせてもらった。

㈱studio-L　醍醐からも説明をする。

【（株）studio-L　醍醐】

先週はすごい吹雪の時に来て、最終日は天気が良かった。今日も天気が良く山並みが見え改めて綺麗だな、素晴らしいなと白馬に来るたびに思う。

弊社はいろんな自治体・地域で総合計画等のお手伝いをさせていただいているのだが、毎回ジレンマを感じることがある。

それは、『１０年計画を立てる』という時に、とは言えこれからの時代、１０年先をなかなか見通せない、という時代にもう入っている。

グローバル化も含め、人口減少・少子高齢化が日本全体で進んでいく中で、様々な課題がこれから地域にも出てくる。

災害支援もそうだが、なかなか見通せないという時代に入っているという中で、１０年先を見越した計画を作るというのは、ある種矛盾した考え方ではあると思う。

そこに自身も毎回ジレンマを感じているところだが、基本理念に役場担当とも議論をしながらあえて表記した部分、例えば、１０年前に考えられた計画の中ではこれほどまでにインバウンドによる観光客の増加が予想されていなかった、と。まさにこういうことではないか。

『１０年後を見据えた計画』なかなか先を見通せない、という時に、もちろん大枠の方向性を示す必要があるとは思うが、いろいろな課題が出てくるのであろうこの時代に、その時代・その時代で“みんなが・みんなで”協力して課題解決に向けて、学びながらアクションを起こしていく・動いていく、という取り組みを進めていく。そういう時代であり、そういう考えが大事だと思っていた。

そういった“学びあい”・“学ぶ”というようなキーワードが、白馬には非常に合っていると感じている。

その要因として、いろいろな外部環境にある種影響を受けやすい村・自治体であるということもあるのでは。

いわゆるスキーブームの頃・高度経済成長を含めて、団塊ジュニアの人口も多く、冬のたびに人がどんどん来てくれる、そんな時代から観光客数が落ち込んだことにより、白馬村は学んできたはずである。

その学んできたことを今後の時代にも活かしていくべきだし、新しい外部の環境や変化してきているソーシャルメディアの更なる発達で、外国人観光客が口コミでやって来る、というまた違った時代の波がやって来ている。そこに踊らされ過ぎずに、新しい価値観も含め交流し、対応していく。いろいろ学んできた白馬だからこそ、それが出来るのではないかと、インタビュー・キャンプ・審議会でいろいろ話を聞いた上で、そういったテーマを盛り込んでみてはと考えた。

さらに、“学び”という意味では、移住者・外国人を含めたポジティブな意味での“多様性”が、白馬のキーワードではないだろうか。

多様なことから学べるということがたくさんある。これまで白馬が培ってきたものでもあるし、これからの時代に大事なポイントでもある。

白馬高校の新しい取り組みも一つの大事なきっかけではないか。人材育成も含め、外の方、いわゆる白馬ファンが多いという強みがあるので、協力し合いながら・学びあいながらお互いが地域や社会の新たな課題に対して取り組みをしたり、新しいものを生み出していく、という視点が今回の１０年計画のキャッチコピーとしてふさわしいのではないかと思う。

そういった観点は、キャンプでいろいろな方と話していく中でみなさん非常に感じておられることだと思ったので、村長にもトップヒアリングという形で話をしたが、「さすが白馬だ！」と思われるようなことも打ち出したいという話もあり、あえて“トップランナー”という言葉を使用した。

日本の社会の中で“トップランナー”というと、東京、とイメージしがちだが、そうではないと思う。『これからの成長型社会』ではなく、『成熟した社会』における日本のトップランナー、というような意味合いが込められているとご理解いただきたい。

以上を補足とする。

【伊藤会長】

素案について事務局からの説明と、studio - L からのキャンプ等のまとめがあったが、全体を通して

何か気づいたこと・意見があればお願いする。

前回までの７つの柱を、大きく４つの柱にまとめたということもあるので、それぞれ関連するところがある方の意見を是非聞きたい。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

会長からもあったが、基本目標を４つに纏めさせていただいた。この目標の４つについて、今まで議論いただいた施策大綱の７つとどのようにリンクしているのか、整理した図を資料としてお送りするので了承願いたい。

【伊藤会長】

目標についての意見はまた改めて機会を設ける。この場は先程の説明を聞いた中でのご意見があればお願いしたい。

【　委員　】

（施策大綱の）７つを４つにしたところ、また文章の中の“多様性”・“学び”というのが、今までと違うスタンス・視点があり目新しさを感じ、より村民にフィットしていると思った。その思いを話していただいてすごく納得出来た。

しかしながら、自分は審議会の委員メンバーだが、studio－L を村民の税金の中から 1,000 万円近いお金を払って（今回の計画を）やってもらっているのだから、今の説明ではものすごく腹が立つ。

インタビューの抜粋だが、これは『予習』の段階ではないか。誰でも知っていることだ。この村の問題であり、この場にいる誰もが知っていることだ。これを何か月もかけてやってこられたのか。ドブにお金を捨てているようなものだと思った。

キャンプについても、誰も出られないような日程だ。（年末年始は）雪が無かったので、（キャンプ日程中は）白馬の正月のよう（忙しさ）だった。休憩も無く、食事を取るのも難しく、家族を総動員するような忙しさだった。

インタビューに３０名程参加したようだが、属性は？写真を見たら役場関係者でみんなサクラじゃないか。結局同じメンバーで、リタイアした人か元お客さんの、何も働いていない人達が来ている。同じ人種じゃないか。意見を聞かなくてはいけない若者・白馬の二代目はこの中のどこにいるのか。

このような日程を選ぶというところが、白馬村を全然理解していないということではないか。それこそ『予習』の段階ではないか。

自分は観光地経営会議でコンサルの方に関わってきたが、studio-L ははっきり言って経験値の少ないコンサルの１つなのかな、と。醍醐氏や山崎氏はとてもカリスマ性が高く有名で認知はしている。ただ、（インタビューを担当した）小山氏に関してはこれでは認められない。

村と御社との契約内容についてまでは存じ上げないが、仮にもコンサルであるならばまず予習の段階で、今までの行政計画の中に様々な意見が集約された資料が既にあるのだから、キャンプ等に費用を投じる必要はなかったのではないか。

既にある意見集約では、醍醐氏が語ったようにこの先の１０年がわかるのか？という世の中だから、困っている。だからこそコンサルを雇うのだ。そこを聞きたいのに、毎回何も出てこない。

次に、基本目標の“トップランナー”という文言だが、自分としては違和感を覚える。この村の住民の価値観は、もっとゆったりとした“充実感”ではないのか。実際、７つ（の施策大綱）を４つに分けたが、この４つの目標を足したら、どう“トップランナー”に繋がるのかが分からないので、違うなと感じる。

それから“新しい仕事を創り出せる村”という項目の中に、『オーストラリア・アジア圏を中心とした外国人観光客』と書かれているが、毎日約１００人の外国人客と触れ合っているが、オーストラリア人観光客はすでに少なくなっている。オーストラリアは資源しかない国なので、中国（の動き）によって経済が左右され、バブルがはじけようとしている。こういう風になったということは、落ちる可能性がある。先ほど醍醐氏が言った通り、１０年後（を見据えた計画）ということだから、『オーストラリア・アジア圏』というのは出さない方が良いと思う。これ（総合計画）を出した時点で、すでにオーストラリア人観光客は減っている可能性がある。それくらい流動性がある。今までみたことがないアメリカ人観光客が今シーズンはたくさん来た。アジア圏の観光客も入れ替わってきている。韓国人観光客は本当に少なかった。ですから（特定の国名・地域は）入れない方が良いと思う。

【伊藤会長】

いくつか問題を指摘されたが、他に何か意見はあるか。

【　委員　】

ここまで聞いてきたが、まず一つに、ここまで来た白馬村、というものの意味が一つも入っていない。それは「自然が良いから、白馬が良いのだ」という一言だけでみんな片付けようとしているのが、あまりにも残念だと思う。

ここで、ここまで生きてきた先輩たちの、ここまで作ってくれたものというのは、一つの“歴史”であり“文化”だと思う。その“文化”という言葉が少しだけ『東山の方の文化が非常に良い』とあるだけ。これは冗談じゃない。白馬村とはそんな文化の無い村ではない。この文化を繋いでいくことによって、子どもたちにも、これから新しく来られるお客様にも、“文化”を繋いでいかないと、白馬村は伸びていかないのではないかと思う。　＜女性：賛成です。＞

白馬村はインバウントで、日本のトップ（の方）でやっていると思えるけれども、自分は（長野）オリンピックの時に新田区長を務めていたが、新田区に入ってくるお客様は日本人よりも外国人の方が多かった。（競技の）開催会場が無く、外国人のお客様で埋まっていた。その時に「日本にこんな素晴らしいところがあるとは思わなかった」と言われた。長野オリンピックによって白馬は、世界中にこれだけの景観や文化（があること）を広めたはずだ。それなのに、素晴らしい“文化”があるはずなのに、その“文化”を繋いでいかなければ、白馬は次の種が、蒔くものが無くなってしまう。オリンピックに種を蒔いたから、インバウントが出来ている。これからは「この次の種として何を蒔くのか」が一番大事になってくると思う。

４つの柱を決めていただいたことは非常に良いことだが、たたき台としては、どこの村に持って行っても当てはまることではないか。これから細かい説明をしていただけるとは思うが、“文化”というものを非常に大事にしていかないといけない。

そう思い（村内を）あちこち見て回っているが、震災があったからか、地域ごとに非常に良い絆が生

まれてきている。これも一つの“文化”だと思う。

白馬はリゾート地だという風に言っているが、最高のおもてなしは“民宿”だと思う。これも一つの“文化”。それなのに、民宿をみんな潰していくだけで、最後に残ったのは有名なホテル、それも残るのかどうか。むしろ白馬で育った人たちが潰れて、都会から新しいホテルを建てる業者が入ってきてしまう。それで何が“文化”だ、と思う。この人たち（白馬で育った人たち）が生きていくところを作る、という大きな考え方を持って行かないと。今こんなことをやっていてはダメだと思う。いま種を蒔かないと。

是非“文化”についても（構想や目標に）入れていってほしい。

【伊藤会長】

意見を踏まえて、事務局から何かあるか。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

仕事・産業の部分の『オーストラリア・アジア圏』と書いてあるところについてだが、具体的な国名等は除かせていただきたい。

委員から出された、白馬村の“文化”・“民宿”といった話が出たが、これも盛り込みを考えさせていただきたい。

【伊藤会長】

事務局からの案について、何かあるか。

【　委員　】

（委員が）言ったように、これだけだったらどこの村にでも当てはまる、というのはその通りだと思う。より他と差別化できる、白馬村の付加価値、というものを“文化”といった面で膨らませてもらうことが出来たら、ふさわしくなるのではないかと思う。この部分はもう少し膨らませ方が足りないと感じる。

【伊藤会長】

全体的に、ということか。

【　委員　】

今の話や先程の話の続きというか、白馬村は“観光”というものである時期からクローズアップされて、その中で、どうも白馬村自体が観光にばかり目が行ってしまったために、本来ある“白馬村の良さ”や“文化”といったものを、ないがしろにしてきたのではないのか、というようなイメージが、外から来た人間としてある。

白馬村の人に聞くと、田舎に行くとみんな同じことを言うが、「こんな何もないところ…」という言い方をする人がいる。「山ぐらいしかない」、その山さえも見慣れているから「あまりインパクトがない」みたいな言い方をする人もいるぐらいで。

もっと地に足を付けた形で、村が、村民自体も含めて、継承して、ある面で使って、より魅力のある

村にしていく。一方でそれをきちんと継承をしていく。そういうシステムを作っていく。そういうところが大切になってくるのではないか。

祭りや村の行事が、少子高齢化の中で、日本全国どこもそうではあるが、伝統的なものがどんどん失われていってしまっている。失ってしまうと、それは無くなってしまうということなので、そういったものを次世代へ繋いでいく努力が必要になってくる。そういったことが、こういうところには全く含まれていない。

“観光”とか、先のことばかりが出てきてしまって、今ある現状というものをもう一度見直して、どう修正して良い村にしていくのか、というような、もう少し足場のしっかりした言い方を入れてほしいと思う。

一番のキャッチフレーズ自体があまりにも薄っぺらいというのがある。“村ごと自然公園”という言い方が前回も出ていて、また使うのか、というのがある。このこと自体は悪くはないが、思いはいろいろあったとしても、これだけが出てきた時に「何か新しいことになるの？」、「これから村が向かっていく方向って何なの？」となった時に、サブタイトルと全くリンクしない。

サブタイトルは“多様性”であるとか、広がりのある、他所にはない白馬村がこれから出来上がっていくために努力をします、というイメージがある。

一方で最大のキャッチフレーズには、全くそういったところがない。現状のことを集約した言葉にしているだけ、という感じになっている。今までも言ってきたこと。

“豊かな暮らし”は、いろいろな意味での“豊か”があると思うが、誰でも求めていることであるし、どこででも言えること。

それが基本ベースにある中で、白馬村として独自のアピールが出来るようなイメージの村に作り変えていきますよ、という意味が、どちらかというとサブタイトルには入っている。

サブタイトルの方を重視するのであれば、もう少しキャッチコピーも変わってくるのではないか、という気がしている。

もちろん、先程自分が述べた事と矛盾するかもしれないが、地に足を付けた生活環境を守っていくことは絶対に必要なことだと思う。その中で、白馬村独自で、白馬村ならではの発展形態をつくる、というコンセプトがどこかに一つあるのだろう、と思う。

それをただ“観光”という言葉にしてしまうと、どこか薄っぺらで、今まで「観光！観光！」と言ってきたのに、さらにまた「観光！」と言うのか、と。もう少し言葉の工夫はないのだろうか、と言う気がしてしまった。

一言で表すキャッチフレーズというのは非常に難しいのはわかるが、パッと見て明るい未来が広がるような、これから村は少し変わっていけるのだな、というようなインパクトのあるもの、という形に少し変えてもらえないだろうか、と思った。

【伊藤会長】

議論が散漫になるといけないので、キャッチフレーズと基本理念にしぼって、みなさんの意見を聞きたい。

この場は審議会で、たたき台であり、これが決定ということではなく、ここで審議していただいて、より良いものを出していただいて決定していく、ということで、変わることもあり得る。何か出してい

ただければ。

【　委員　】

広報はくば最新号を見て驚いたのだが、『白馬村第５次総合計画の基本構想に関する意見公募』とあるが、募集期間が２月２２日から３月１３日までとあるが、２２日といえば来週月曜日だ。

これでパブリックコメントを求めるべき対象はどれを指すのか、基本構想と書いてあるが。

そうすると、「変わりうる」ということではないだろう、来週月曜日から意見を求めるわけなのだから。

それが一つと、前回７つの施策大綱、やっただろう。それに対して委員の意見を求めた。今日来てみれば変わったペーパーが全く出てこない。

こういう運営のやり方は議論が前へ進みにくいと思う。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

７つの施策大綱について意見を求めさせていただき、今回４つの基本目標に集約をしたことにより、そういった審議が進まないという意見が出てくるとは思っていた。

ただ、この中で話をしていく中で、７つでいくと村民の方にはわかりにくいのではないか、という部分が出てきたので、施策大綱の７つからエッセンスを抽出して４つの基本目標にまとめて、施策大綱については基本計画の体系の中で実際に活かしていく、という方向で考えた。

今回、委員から出た意見をまとめたものを示して説明が出来れば良かったのだが、資料が出せず余計に混乱をさせてしまったことについては申し訳なかった。

基本目標については、皆様にわかりやすくするという意図により、協議の上４つにすることを決めた。

パブリックコメントについては、２２日からということで広報している。

次第にも書いてあるが、２２日の正午までに（委員より）意見をいただこうと思っていた。

事務局へ正午までにいただいた意見を、直せるもの・意見をいただいたものをなるべく反映して、２２日の夕方・夜くらいからパブリックコメントをいただく、という予定にしていた。

議会に出すにあたり、３週間ほど募集期間は必要であろう、ということになるし、月曜日にもう一度委員会を開くのも難しいので、意見をいただいて事務局で直せるだけ直して、提示をしようと考えている。

その部分については２５日の審議会で、委員の皆様からいただいた結果、庁内から出された意見の結果、といったものを反映させて、提示し説明をしようと考えていた。

【伊藤会長】

委員が指摘した通り、前回の７つを今回まとめるということが前提で話があれば良かったが、それが無かったので少し乱暴だったので、申し訳なかった。

【　委員　】

そうすると、今日出てきた資料の１４ページからの基本構想がベースになり、２２日までに委員から意見をもらい、その日に村民に公表するのか？ 意見が出てくれば、そんなに簡単にはいかないのでは

ないか。そこのところを危惧するが。

前回の７つの項目と、今日の４つを見て、今日の方が村民にわかりやすい、というふうになるだろうか。

基本構想だから仕方ないのかもしれないけれど、もう少し具体論が示されれば、ホームページを見る立場の人にも親しみやすいと思う。

今日配られた基本構想、これでもって意見をください、と言っても、結構なことが書いてあるだけで他の自治体でもあてはまることなのに、これだったら「何か言ってくれ」と言われても、なかなか村民からは意見が出てこない。

せっかく３日間かけてキャンプやヒアリングをやったのだから、どういうことをやったのかの説明はあったが、どういう意見が出てそれを整理するとこうなります、という報告をしてもらった方が、事情があってキャンプに出られなかったので、その方がわかりやすいと思う。

いま村民はどういうことを考えていて、何を感じていて、先行きどうやりたいと思っているのか、ということがわかって、そういうチャンスが、日程が厳しくて出来ないのかもしれないけれど、書いたものでも、文章にして整理したものでも出してもらった方が有難いと思う。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

文章での整理という部分については、㈱studio-L に依頼してあるので、整理をして提出をする。

村民への公表という部分については、㈱studio-L と相談し、可能であれば公表する、という風に考えている。

【伊藤会長】

他の委員からは何かあるか。

【　委員　】

観光局長という立場だとなかなか言いにくいのだが、２年前くらいから東山の方をずいぶん回ったが、おそらく１０年後には廃村になってしまうのではないか、人が生活をしなくなってしまうのでは。

白馬村というのは、スキーによって恩恵を受けた地区と、そうではない地区と、川を挟んで結構ある。そういった白馬村ならではの地域による実態の相違というものを相当感じた。

それをしないと、たぶん白馬村の半分は無くなってしまうのではないか。まさに限界集落は西側にではなく、東側にある。そういうことを押さえていないと。

studio-L に伺いたいのだが、東側の、観光地ではないところをどれだけ行かれたのか。

地震の前に古民家をずっと回ったのだが、かつて使われていた古民家がずいぶんと無くなっている。そういう中で、どうしたらこういうものが活用できるのか、ということで、地震の前に動いていたのだが、地震があったために、一旦中止になってしまった。雪も降ってしまったので。

地震の後、雪が解けてもう一度回ってみたら、さらに酷くなっていた。おそらく、東側の限界集落化は地震によって加速されるだろう。

個人的には、観光局とは関係なく『古民家再生ネットワーク』というものを立ち上げようとしていて、賛同者を募っているのだが、なかなか難しい。

自分は非常に危機感を持っている。実態を調べると、地震の後、廃墟になっているところが増えている。そういったことを、ここならではの問題として押さえていかないと、バラ色の１０年後を考えたときに、半分はバラ色どころか廃村になってしまっている。

そこまで現状を分析して、逆に言うと、外国人がたくさん来ていて発展しているというスキーだが、よく見ると、もう一段掘り下げると、外国人による阻害が出来ている。訴求されているのは、一般的な白馬の人たちではなく、治外法権みたいな部分が出来つつある。

そういった現実問題を押さえないと、１０年後、“バラ色の白馬村”は非常に難しいと思う。是非、折り込みの中に少し“危機感”を感じてもらえるような文章を入れていかないと、村民は何も行動を起こさないのではないかと思う。現実は非常に厳しいと感じている。

白馬村は、“観光”ではなく“スキー産業”にここ５０年、恩恵を受けてきた。そこのところを認識しないと、次なる一手は打てないような気がする。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

委員から意見をいただいて、以前の審議会でも話したが、やはり各地区、特に小規模部落の役員からも、単身高齢者の世帯が増えているといった危機感を、ここ数年訴えてくる地区が非常に多い。

ただ一方で、東山の地区の皆さんも、決してこのまま座して地区が無くなっていくのを待っているというわけではない。自分たちの文化を何とか守ろうと努力をされている方々がいる。

たしかに危機感という部分は、村の中で課題として挙がってきているし、それを地域の皆さんとどういう風に活性化をしていくか、ともに地区の伝統を、先程の“文化”の話にも繋がってくると思うが、地区の文化、人々の暮らしをどういう風に行政と共に守っていくのか、そういった部分の文章の入れ込みというのは可能だと思うので、検討をしていく。

【　委員　】

自分が『古民家再生ネットワーク』で言っているのは、古民家というのはきっかけであり突破口である、ということ。昔からある、白馬の生活様式・里山の暮らしを現代に再生していくための突破口である、と考えている。

スキー文化の恩恵を受けにくい、あるいは受けにくかった、逆にいうとそのために残っている良さがある。

古民家を（村の）西側と東側で分けると、西側の方は、外れにはあるがほとんど少ない。東の方にはずいぶん残っている。それは、スキー文化・ウィンタースポーツの文化に直接的に関わらなかったので残っている。農業・林業をずっと続けてきたことによって残っている、という部分があると思う。

その辺りは構図的に分析して、これからの村づくりも、個別に、それぞれの地区の事情に応じて進めていかないと、一律に、「日本をリードしていくところだ（トップランナーの部分）」と書いているが、もっと深刻じゃないか、と思う。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

いま北村委員が話されたように、『地区ごと』というのがキーワードになってくると思う。studio-Lとも話をしていたのだが、基本計画の部分で、今では画一的に村の様々な施策を進めるのは限界にきて

いる部分もある。特に過疎集落の進行等の部分に関しては顕著だ。
特に白馬村の中は非常に、地域ごとに文化も違うし、経済的な仕組みも違うので、地区ごとにそれぞれの進行できる施策を基本計画の中に作っていきたいと考えている。
ただ、その前段として今回の基本構想の中では、そういった地区ごとに違いがあって、それぞれの地区ごとに、画一的なものではなく、それぞれの細かく丁寧な手当てが必要になってくる、といった文言を入れ込んでいけたら良いと考えている。

【　委員　】
基本構想としては良いと思うが、次なるステップを考えた上での基本構想でないと、構想のままで１０年が経った時に、何が出来たのか、ほとんど出来なかった、という話になってしまうのではないか。
自分はいま『古民家再生ネットワーク』の活動に賛同する方のところを回っているが、なかなか動きにならない。無理だ、と言われる。

【　委員　】
すごく大事なことなのに、もうすでにパブリックコメントを取ろうという段階・日程まで来ているのに、観光局長の委員のようなキーマンのインタビューはされなかったのか。なぜここに落とし込まれていないのか。いま新しく出てくるべきエレメンツじゃない。パブリックコメントを取ろうという時に話し合う内容じゃないと思う。
委員長が言った通り、今ここではタイトルとサブタイトルに関して話し合うべきではないか。

【伊藤会長】
これは総合計画の顔みたいなものなので、ここが決まらないと次にも進めないような気もするので、時間も無いが、ここだけは何とか、なかなかすぐここで案というのもないかもしれないが、少なくともこんな風な、といった方向だけでも出してもらいたい。
いま出てきた、たたき台の案が良いのか、少し修正が必要なのか、全く方向性が違うのか、何か意見があれば出してもらいたい。

【　委員　】
これが良いとか悪いとかではなく、先ほど過疎化の話も出てきたが、白馬もいずれは過疎化の方向に向かうことが確かにあると思う。その中で、いろいろなものを見ていく中で、すでに過疎化が進んでいる集落や村の気持ちは報道などでご存知だろうが、問題は、そこに生きてく生きざまを豊かな生きざまにしていかなくてはいけない、ということだと思う。
金儲けではなく、心の豊かな村があれば、次の世代に繋がっていくと思っている。なので、金と一身、という考え方ではなく、もう少し村全体が「おらほは田舎なんだ」と、どこへ行っても胸を張って「田舎者だ」と言えるぐらいの、心の豊かさを白馬はこれから持っていかなくてはいけないと思う。

【　委員　】
自分は、委員が言っているように、タイトルに“豊かな”とか“観光”というものを入れない方が良

いと思う。

具体的なことを入れずに、白馬村の人たちが外国人も含めていろいろな属性があり特殊だと思うので、すごく抽象的な言葉で、例えば“しあわせ”など、みんな価値観が違って受け取り方が違っても、“しあわせ”というのはその人の心の中で芽生えてあるものだから、もう少し短く、抽象的な大きな言葉でも、万人に受ける言葉でも、良いのではないか。

その後のサブタイトルで、醍醐氏が言った“多様性”とか“学び合う”というものが入っても良いのでは、と思う。

先ほども出た話だが、タイトルとサブタイトルが結びつかない、言葉がたくさんあり過ぎてぼやけている、という気がしている。

【　委員　】

基本的には、先ほどから出ている“伝統と文化”ということや、“これからのこと”と考えたときに、いま住んでいる人たちも、これから住もうとする人、観光で来る人も含めて、みんなが白馬を好きになる、みんなが「ここは良いところなんだよ」ということを醸成するような村になる、というようなイメージを挙げた方が良いのでは、と思う。

いわゆる『白馬愛』を、より強くする。それは、住んでいる人、これから来る人たちも含めて、みんなが白馬に対して良いイメージを持ってもらう、そのためにはどうしていくのか、というような形で大きな目標があって、その中にいろいろな個別のことがある、という感じがする。

そのくらいの大テーマであっても良いのではないかと、個人的には思う。

【事務局　総務課企画課係長　太田】

いま、委員から、「住んでいてしあわせ」「ここで生きていて良かったと思える」、といった意見が出たが、１５ページの最後、村長の一番強い思いを載せている部分として、『１０年後に、住民・観光客など白馬に集う全ての人が「住んで良かった」「生まれて良かった」「来て良かった」と思える白馬村をつくりたい』、この思いが村長の中で一番強い、ということで入れた一文である。

いま意見を聞いていく中でキーワードとなるのが、“多様性”という部分、“文化の継承”という部分、居住している皆さんの“しあわせ”をいかに育んでいくか、ということだが、この３点をもってタイトル・キーワードに何か良いものが、ということで、studio-L からも意見を伺いたい。

【㈱studio-L　醍醐】

実は、このタイトルについて事務局と議論していく中で、確かに今メインになっている方は、一般的な、ある種のありきたりな部分がある、といった話もあった。

前回の計画の踏襲というところも含めて、村長からも話をいただいていたので、その部分をどう残しつつ新しいものを入れていくか、というところで、委員からの意見の通り、サブの方にかなり、自分たちとしても大事だと思っている、より新しいもの・これからの白馬にとって大事なキーワードだと思えるものを、入れ込んでいった。

なので、委員各氏が「こちらの方を多く、前に出した方が良い」と言うのであれば、そういった形でも良いし、もう少し“しあわせ”等キャッチーな、本当に大事にすべき更なる他の言葉を盛り込む必要

がある、と意見を伺い、感じた。

委員から出た“豊かな”というところも、普通に“豊かな”と言ってしまうとありきたりになってしまうが、委員が言ったような「“豊かな”という言葉に何が込められているのか」といった、説明しなくてはいけない部分が抜け落ちているのではないか、というのが委員からの意見ですごく感じた。これは弊社の責任だと思っている。

個人的ではあるが、“豊か”という言葉をあえて使用するのが良いと思ったのは、暉峻 淑子 著『豊かさとは何か』で、まさに「“豊かさ”とは、何が“豊か”なのかということを、もう一度日本人は問い直していかないといけない」とある。それが白馬の、いろいろな大きな波も含めて、経験してきた白馬だからこそ、これから“豊かさ”というものを改めて考えていく、とらえていく必要があるのではないか、と思ったので、あえて、一般的に見たらありきたりな言葉に見えがちだが、“豊か”という言葉が良いのではと、キャンプやヒアリングを通じた中での提示だった、という経緯がある。

ただ、繰り返しになるが、そこの説明であったり、何が“豊か”なのかといった理念の部分を、もっときちんととらえて、委員が言ったように、土台の部分だったり、何を大事にしていくのか・何を基盤にしていくのかといったところ、あるいは、各集落・各地区の違い、それこそニセコとは違う白馬、ニセコについても勉強しているが、いま外国人観光客が増えてきていて、移住者も増えてきている。移住施策もかなり打っている。勉強していく中で、ニセコは白馬とはかなり違うと感じた。ニセコはある程度“作られたリゾート的な町”。白馬は、歴史も、文化も、地域の営みも、“受け継がれてきた村”という地域社会の基盤が確実にそれぞれの地区にあり、白馬という一つの共同体としてもある。

そういった違いも含めて白馬は、だからこその“先進性”ということ。『トップランナー』という横文字を使ったことは自分も、どうかな、と思った部分もあったので、指摘いただいて有難かった。

そこの部分も含めて、白馬だからこその“先進性”あるいは“守っていかなくてはいけない、受け継いでいかなくてはいけないところ”をもっと掘り下げて文章化していくということの重要性を指摘いただいた、と思っている。

【　委員　】

まさか、studio-L 側も今日こういう展開になるとは思っていなかったのではないか、という風に感じている。

いまニセコの話も出たが、自分が個人的に思うことかもしれないが、白馬村が建物に規制などをかけたことが非常に大きい、先見性があったと思っている。あの時、もしいろいろやっていれば、ニセコのようにいろいろ建ってしまっていたら、白馬はどうにもならなかった。あれは、基本的に開発条例を厳しくというか、一番大きかったのではないかと感じているところだ。

もう一つ、先ほどから議論に出てきているが、１４ページの『オリンピック時の過剰投資』という言葉があるが、引っかかりがある。誰も過剰投資だと思ってやったわけではない。オリンピックを迎えて頑張ってやろう、ということでやったわけで、結果において、ちょっと投資し過ぎたかな、というだけで、一民宿だけではなく、白馬村自体が、白馬村全体が過剰投資だった。だからこういう結果がある、というところで、この『過剰投資』という言葉を、もう少し考えてみた方が良いのでは、と感じた。

これは旅館やペンションがダメになったということではなくて、白馬村全体がそうなったのではないか、と思っている。

思うに、オリンピックの時は非常に“ワクワク感”があった。「オリンピックが来る！みんなで行こう！」と。人口もうんと伸びるだろう、と。まさかこんな状況になるとは想像も出来なかった。いま議論を聞いて感じるに、“ワクワク感”といったものが何も無い。古民家もそうかもしれないが。

最後に出てきた「生まれて良かった」「住んで良かった」「来て良かった」は全て結果で、結果が良ければ良し、じゃなく、その度に何をするか、もっと“ワクワク感”といってものをどういう風に感じるか、というところに重きを置いてやっていかないと、「生まれて良かった」「住んで良かった」「来て良かった」は結果。そのためにはするには何をするのか、といったところを、もう少し深く、難しくはあるが。

オリンピックの時はみんなで一気にやった。今はそれが無い。だから、困る。“ワクワク感”のあるものが欲しい。もう一度オリンピックをやろうか、とか。それはちょっとキツイかもしれないが。

何か“ワクワク感”のあるものでないと、せっかくやっても、作るということは大変なことで、だけどそれが信じ合うというか。

仕事をするとき、パンフレットを作る時など、一生懸命作っている、こういうイベントをやりましょう！と。そこにエネルギーを使って、ではそれをどこに配るのか、どうするのか、が全て抜けてしまう。全集中力を使って一生懸命に作って、作り終わればただそこに置いておくだけになる。どこに配るのか、どうするのか、が何も無いとまずいので、第４次総合計画もそうだが、見返してみると、企業をいっぱい誘致しようか等たくさん書いてあったが、そんなものは無い、ということになってしまっている。

とにかく“ワクワク感”が持てるようなものを何か一緒に、と思っている。

１７ページの『新しい仕事を造り出す村』の辺りに、「ＰＤＣＡサイクル」とあるが、これは全体に掛かるのではないか。『安心してみんなが暮らせる村』だけの「ＰＤＣＡサイクル」ではない。まさに全体に掛かるところではと思うので、一考していただきたい。

これは村にとって、自分たち委員にもそうだが、これは非常に重い課題になる。これがはっきり打ち出されないと、責任も権限も、訳の分からない曖昧な体制になりかねないので、一部分にだけではなく全体に掛けるようなところを、考えていただきたいと思う。

【　委員　】

基本理念のところで、３日目のキャンプに参加し様々な課題がたくさんあったが、白馬の持っている凄さ、潜在能力の高さが物凄いものだと改めて感じた。

本日の議論の中でもたくさん出てきたが、自然も超一流、オリンピックを開催した歴史、文化もいたる所に素晴らしいものがある、人もそれぞれすごい活躍をされている、観光・農業といった産業も他では真似の出来ないものを持っている。

こういう理念というところだが、これだけの潜在能力のある白馬が持っている価値というものを、さらに高めていく。村民が誇りと自信を持って、先ほど（藤田委員が）言われた“しあわせ”という言葉が個人的には大好きなのだが、それぞれが“しあわせ”に生きていれば、他の人たちも当然魅力を感じて白馬に来てくれると思う。

村長が言う「生きていてしあわせを感じる白馬」、自分は委員と同様に『トップランナーを目指す』にはピンとこないが、そうではなくて一人一人が“しあわせ感”を感じる白馬村、そういう白馬に価値観を高めていく村民、そういうところが一つの理念に関わってくるのではないかと思う。

【伊藤会長】
具体的に、また少しキャッチフレーズ等を作り変えるようになると思うが、『村ごと自然公園』という文言は残すというのは、どうだろうか。気になる委員はいるか。

【　委員　】
気になる。これを残した方が良いのか、どうか…。すごく気になる。

【伊藤会長】
他の委員はどうか。

【　委員　】
去年の村民アンケートの結果を見ると、ここに暮らしている人の関心は、物凄く高い。環境や景観に対して、守ってほしい、という意見があるから、『村ごと自然公園』は別に、多少表現を変えても良いのかもしれないが、要するに「自然を大事にしよう」ということだから、自分は残しても良いと思う。

【伊藤会長】
では、その辺りを中心にして、キャッチフレーズ あるいは サブタイトルを、それに整合するようなものにもう一度考え直していく、ということでどうか。
これからの日程のこともあるので、これからどんな風に修正をするのか事務局から説明をする。

【　委員　】
農業関係のところで、１７ページと１８ページ、それぞれ中段のところに圃場整備について両方に記載があるが、何か意味合いがあるのか。
認定農業者に圃場整備をして条件を良くして渡してあげたい、というのがあるのだが、両方に必要なのかどうか、意味があるのか伺いたい。そうでなければ、検討をしていただければと思う。

【事務局　総務課企画課係長　太田】
営農の関係と、休耕田の対策・景観の保持という部分で、両方の意見が出たので記載した。

【　委員　】
理由があるのなら、それで良い。

【事務局　総務課企画課係長　太田】
いろいろ意見をいただいた中で、キャッチフレーズの部分と理念の部分で、盛り込めるものは盛り込ませていただき、事務局と studio-L で今日・明日で修正を加え、提示をする。
郵送するので、意見募集については２２日の正午までに、引き続き意見をいただきたい。
パブリックコメントについては、２２日の夜からを予定していたが、委員からの意見がいろいろ出て

くるかもしれないので、日程については意見が出てきた中で若干検討をしていく。

【伊藤会長】
直したものは、委員にはどのように周知するのか。

【事務局　総務課企画課係長　太田】
これから考える。直接配布という形になるかもしれないし、とにかく、修正したものが素早く委員へ渡せるよう考える。

【伊藤会長】
修正案が配られるそうなので、それを見ていただいて、次の会議の時にまたお願いする。
次に、パブリックコメントについては意見もあったので、期間等見直すということなのでお願いする。
全体を通じて何かあるか。

【　委員　】
大体の、全体の調子が、観・産業、観光と農業、と言っているけれど、観光に偏っていると思う。農業については数行しか書かれていない。
そうかと言って、これをどうしたら良いのかというアイディアは、すぐには出にくいのだが、白馬村の農業は担い手におんぶしてもらう農業で良いのかどうか、という疑問は持っている。
ここには農協の方・農業委員会の方もいるので、専門家の意見を聞いて、農業の部分はもう少し詳しくても良いのではないか、と思う。
やはり、立派な田んぼ等が無いと、観光地としても今一つ値打ちが落ちるような気がする。

【伊藤会長】
では、委員、何か意見を。

【　委員　】
ごもっともな意見だ。大型の農家に、国の施策がそう動いているのだが、この村のことを考えたら、基本は自給自足も始まって、自分の周りにある農地を大事に守るというのが基本だと思う。
ただ、手の回らないところは、（大型の農家に）お渡しをする。それから、家から離れてしまうと段々手を抜いてきてしまうので、そういったところは少し手を入れて、区画をきちんとして作業をし易いようにする、というのはあるのだが、基本は農家でこの村はずっと、山の炭を焼くか、お蚕を飼うか、その後は田んぼで…、と生きている村なので、いま言われたように、全てを大型農家に渡せば済む、というものではないし、自分の周りのものは自分で、昔からの自然を守るという形は、いま言われたように大事にしていきたいと思っている。

【　委員　】
ですから、後継者問題があると思うが、白馬に都会から移住して農業をやりたいという人を何名か知

っている。堀之内の方で外国人の方が米作りをしているとか。
もともと白馬の地主ではない人が白馬村に来て農業をやりたい、と。そういう人たちを後継者問題とも絡めて、どうやってバックアップしたら良いのか・出来るのか、そういう視点があっても良いと思う。
休耕地があまり増えるとみっともない気がする。

【　委員　】
いま国の法律で、農地を持つ、権利を得るのに、大変な負担がかかる。
うまく有効に使うには、市民農園ならぬ“市民水田”みたいなものを用意して、大型農家の耕作している横に、いま言われたように、気のある人たちを応援しながら共々生きていくとか、これからいろいろな具体例を出していかなくてはいけないと思っている。
これはあくまでも表面的なもので、この次に本当の意見を出して、「ここのところは圃場整備をしていないが、興味のある人にはこのグループが応援するから、どうですか」とか、景観を残しながらなど、いろいろある。
特に新田あたりの、江戸時代に作った石垣の田んぼは自分も残したいと思っている。そういうところはむしろ段々になっていて条件が良くないが、そういうところを、これからの話し合いの中から具体的に、「こんな応援体制があるから、興味がある人はここでお米を作ってみませんか」とかやれば、また田んぼの見方も変わってくるし、応援団も増えると思う。
その話は、またこの次、どんどん先の話になってくると思うが、そういう夢のある話は自分も大賛成なので、是非いろいろな良いアイディアを持って進んでもらえればと思う。

【　委員　】
そういうことから言うと、こういう具体的な（アイディアなどの）文言を入れるのは無しの方が良いと思う。全てに入れなくてはいけなくなってしまう。

【伊藤会長】
そろそろ時間なので、今日の資料を持ち帰り、委員はそれぞれ、福祉や防災、教育関係者・産業・観光等いろいろな分野の方がいるので、これを持ち帰って意見等あったら、意見書の提出をしていただくということで。
個人的な意見でも良いし、話し合う機会があれば、出していただければと思う。
協議事項については以上で、その他ということで事務局から。

【事務局　総務課企画課係長　太田】
今回いただいた意見を元に、基本理念、特にキャッチフレーズの部分について、また修正をして提示をさせていただく。それをもって、２２日までに意見をいただきたいと思っている。
次の開催予定日は、２月２５日 午後２時から ふれあいセンター学習室で行いと考えている。
そこでは、いただいた意見の集約や修正案の提示をしていこうと考えているので、お願いする。

【伊藤会長】

長時間、ありがとうございました。

4. 閉　会

【事務局　企画係長　太田】

閉会を宣言した。